

広瀬の歴史は、 その河川形態にあり



「縄文広瀬人」も川と共に生きていた

「道の駅とおわ」から西へ。川平トンネルの手前を左に入ると広瀬である。蛇行する四万十川が囲んだ半島型の地区。対岸の井崎地区とを結ぶ広井大橋が半島の中ほどに架かる。その少し下流の対岸(井崎側)に「下津才」という飛び地がある。

広瀬は文字通り「川の瀬が広がっている所」である。この地形が広瀬地区と対岸の井崎地区の歴史を作ってきた。

まずは広瀬遺跡。現在は田畑となっている。この遺跡からは、縄文時代前期～後期の土器や狩猟道具、装飾品などが発見された。中でも注目されるのは石錘が大量に見つかったこと。これは、漁網につけていたとされている石の錘で、すでにその時代から網を使って魚を獲っていたことを示している。網のことについては次回の「井崎」で触れたい。

川の瀬が広いだけでなく、対岸から複数の谷川が注ぎ込んでいることも、太古の昔から広瀬を良い漁場たらしめた理由であった。

四万十川の河川形態がここから変わる

時代を一気に進める。近代になってからも広瀬は川と共にある。鮎漁が盛んに行われたことは言うまでもないが、特筆すべきは、明治時代後半から始まった営林局による木炭生産事業に伴う河川舟運である。当時、十和村内で生産された木炭のほとんどが舟で四万十川を下り下田港へと運ばれた。この時、広瀬までは「センビ」と呼ばれる小型の舟が用いられ、広瀬でより大型の「高瀬舟」に積み替えたという。積み替え地が広瀬

だったのは、ここから先は川幅も広がり、大きめの舟の運行が可能だったからである。一部、小野にも高瀬舟があったというが、広瀬が西土佐の江川崎での乗り換えがメインだった。また、筏を組んでの木材出荷においても要の地で、川幅狭く難所が多い上流から下ってきた筏をここで組み替えた。

あの瀬にもこの岩にも名前がついている

さて、広井大橋ができる前は沈下橋があった。沈下橋ができる前は渡し舟。この舟の渡場があったところに「ロクセンバイ」という名の岩がある。大水が出てこの岩が隠れると、通常は五銭の渡舟賃が六銭になったことからその名がついたのだそう。これだけではない。前述の筏の組み替え場所は「イカダノバ」など、広瀬と井崎に挟まれた区間の四万十川の瀬や岩には「もれなく」と言えるほど名がつけられていることに驚く。この地の人たちが「川の人」であり続けてきたことがよくわかるのである。



約20年前に作られた
広井地区紹介パンフレット

町のうごき

(1月31日)	人	口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	7,191	-15		男 0	14	10	11
女	7,724	-15		女 1	19	11	8
計	14,915	-30		計 1	33	21	19
世帯数	7,930	-12		(1月中の届出)			
窪川地域 10,638人		大正地域 2,043人		十和地域 2,234人			